



## 法学部長 森川幸一 教授

もりかわ こういち

熊本市出身。東京大学法学部卒。専門は国際法、特に国際安全保障法、国際人道法。最近の共編著として、『国際法で世界がわかる』（岩波書店、2016年）、『安全保障と国際関係』（内外出版、2016年）、『プラクティス国際法講義【第3版】』（信山社、2017年）、『ビジュアルテキスト国際法』（有斐閣、2017年）など。

## 大学教育雑感

### はじめに

学生が自分たちのことを「生徒」と呼ぶのを聞くようになって久しい。言うまでもなく「生徒」は中高生のことを指し、大学生は「学生」である。現在の大学では、教養科目や専門科目を教える前段階として、入学してきた「生徒」を「学生」に「転換」させる転換教育の必要性が高まっている。いかにして「生徒」を「学生」に変えるか、現在大学教員は、以前にはなかった深刻な悩みに直面している。そのことを書く前に、自分自身のことにも触れておこう。

### 「生徒」から「学生」へ

高校までの18年間を九州の地方都市、熊本で過ごした私にとって、東京での生活自体も戸惑いの連続だったが、大学での講義はそれ以上に驚かされることばかりだった。大学で初めて触れた第二外国語のドイツ語のクラスでは、半年間の簡単な文法の授業の後、いきなりモーツァルトの『魔笛』の脚本を

読まされたり、カフカの『変身』を読まされたりした。英語のクラスも今のような英会話の授業はなく、もっぱら担当教員の専門の文献をひたすら読まされた。それは、フロイト心理学の本であったり、ルネサンス期から19世紀にかけての英詩の本であったりと、今までに触れたこともないような豊饒な文化の世界が大学にはあった。

私の入った大学では、法学部進学予定者に対して、1年次には教養科目としての「法学」があるのみで、専門科目は2年次にならないと履修できなかった。この教養「法学」は、後に最高裁判所の判事になられた英米法の大家、伊藤正巳先生が担当されていた。伊藤先生のお話で特に印象深かったことは、これから法律を勉強しようとする人は、人間のこと、社会のことを知らないといけない。そのためには、法律の専門書ではなく、小説を読んだり映画を見たりしなさい、と仰っていたことだった。

入学当初、法学部に入ったからには司法試験の一つでも受けてみようと思っていた私は、先輩の勧めに従い、2年次生向けに開講されていた星野

英一先生の「民法総則」の講義を大教室の後ろの席に潜って聞いてみた。当時、まだ「学生」になりきれていなかった私は、星野先生の講義を聞いても教科書を読んでも、その内容がほとんど理解できなかった。法学部を選んだのは間違いだったかもしれないと後悔しつつ、私は1年間、伊藤先生の教えに従い、自分の興味の趣くままに色々な分野の本を読み漁り、当時の学生なら必ず手にしていた情報誌『ぴあ』を片手に映画館めぐりに精を出した。

2年次生になると、法学部の基本的な専門科目が始まった。憲法、民法、刑法、国際法などの科目が2年次に配当されていた。1年次に最初の何回か潜りて聞いた「民法総則」のその年の担当は、その後、専修大学で同僚としてご一緒することになる平井宜雄先生であった。平井先生のお話が分かりやすかったこともあったのかもしれないが、2年次になった私は、1年次にはまったくついていけなかった法律学の専門の講義にも十分ついていけるようになっていた。私は自分自身が「生徒」から「学生」になったことを実感した。

### 国際法との出会い

この年、私の人生にとって大きな出会いがあった。それは国際法を担当されていた寺澤一先生の講義を聞いたことである。人類の夢である戦争の違法化・人道化に国際法がどのような役割を果たしてきたかというものだった。ご自身も学徒出陣されシベリアでの抑留生活を体験された寺澤先生の国際法の講義は、現実的ではありつつも高邁な理想を追い求める先生の熱き思いが伝わってくるような印象的な講義であった。

この講義を聞いたことがきっかけで、私は3年次、4年次と国際法のゼミナールを履修し、卒業後は法学部の助手として寺澤先生の下で国際法の研究に従事することになった。地方の県立高校出身のおくでの大学生だった私は、特別に法律の勉強がしたくて法学部に入ったわけでもなければ、裁判官や弁護士にあこがれて司法試験を目指していたわけでもなかった。いまにして思うと、受験勉強から解放され、自分の興味の趣くままに好きな本を読み漁り、友人と未熟な議論を闘わせていた大学1年次の助走期間

と、2年次の国際法との出会いが、まがりなりにも研究者として大学で糧を得ている現在の私の原点であったような気がする。

### 転換教育のありかた

現在の大学教育の現状に戻ろう。専修大学では、入学してきた1年次生に向けて、学部の垣根を越えた転換教育として、高校までとは異なる大学での学びや生活にスムーズに移行できるように少人数制（20～25名）の「専修大学入門ゼミナール」を開講している。講義でのノートの取り方、本の読み方・まとめ方、プレゼンテーションの方法など、高校までの受動的な授業とは異なり、学生が主体的・能動的に大学での講義に関わっていきけるようにするためのアカデミック・スキルの習得を目指すプログラムである。こうしたプログラムが必要になった背景には、文科系の学部においてすら、高年次になっても専門書を理解する読解力がなかったり、最低限必要な文章力がなかったりする学生が増えてきている現状がある。

思い起こせば、私自身も大学に入りたてのころは、「学生」になり切れない「生徒」だった。ただその当時は、転換教育という言葉もなければ、実際に、現在専修大学で展開しているようなプログラムを実施している大学も、日本中どこにもなかったはずだ。当時の学生は、私も含めて、先生から一方的に与えられる知識を受動的に吸収する「生徒」から脱皮して、自分で学びたいことを主体的に選択し課題を見つけて自分の力で解決できる「学生」になりたいと切望していた。そのために身につけるべきスキルも誰も教えてくれない以上、それぞれが試行錯誤して見つけるしかなかった。今の学生は、ある意味で恵まれていると言えなくもない。「生徒」から「学生」になることまで、大学が懇切丁寧に後押ししてくれるからである。しかし、それだけで「学生」への転換が可能になるわけではない。大学ができることはあくまで「後押し」までである。新入生がこうした機会を最大限に利用して、一日も早く「生徒」から「学生」へと自己転換してくれることを切に願うばかりである。